

## イザヤ書11-12章「残りの民に備えられた救い」

### 1A エッサイの根 11

1B 主を恐れる知識 1-5

2B 獣にも及ぶ平和 6-9

3B 残された民 10-16

1C 諸々の民の集結 10

2C 世界からの帰還 11-12

3C 一致による力 13-14

4C 全域の平和 15-16

### 2A 救いの喜び 12

1B 主にある泉 1-3

2B 良き知らせ 4-6

## 本文

イザヤ書 11 章を開いてください。イザヤの預言を私たちは、読み進めています。7 章から 9 章 7 節までに、主が、男の子を通して救いを与えられる預言を主は与えられていました。その子は、インマヌエルと呼ばれ、神の御子でもあり、ダビデの王座から出て、世界に正義と平和をもたらします。それから、9 章 8 節から預言は、エルサレムとユダから離れて、北イスラエルへと向かいました。主が裁きの御手を伸ばし、アッシリアが北イスラエルを滅びるままにされます。しかし、アッシリア自身が、神に高ぶっていました。そこで、主がアッシリアを滅ぼされます。イスラエル人で、残りの者たちが、この危機の時に神により頼みます。「10:21 残りの者、ヤコブの残りの者は、力ある神に立ち返る。」

11-12 章は、これら、イスラエルの中で、主に立ち返る残りの者たちに対して、主がすばらしい、救いの約束を与えられる約束が書かれています。私たちは、主ご自身ではなく他のものに頼っている時に、前回学びましたが、高ぶっています。けれども、アッシリアに取り囲まれたエルサレムのように、何も頼ることができなくなった時に、私たちは神を求めることができるようになります。パウロが、自分が弱められた時に、そこにキリストの恵みが十分にあって、キリストの力が弱さのうちに完全に現れる、と、イエス様が語られました(Ⅱコリント 12:9)。このような者たちに対して、主は、すばらしい救いの約束を備えていておられます。

### 1A エッサイの根 11

1B 主を恐れる知識 1-5

<sup>1</sup> エッサイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

10 章の最後のところで、主が、アッシリアの高ぶりを、木に喩えておられました。そして、それらの木を激しく切り倒すと宣言しておられます。高ぶりを徹底的に、完膚なきまでに低められるということです。それに対比して、ここでは、根株からの新芽、そして若枝を語っておられるのです。低いところから、救いが出てくることを教えています。

「エッサイの根株」は、ダビデ家のことです。ダビデが、エッサイの末の子として生まれました。サムエルが、ベツレヘムに行きました。主によって、そこにご自身のための王を見出したから、とのこと。七人の息子がいました。油を注ごうとしたのですが、主から示されません。子どもがまだいたのです。羊の番をしていたダビデです。このように、末の子として大事にされなかったところで、神が選ばれた人なのです。彼が、イスラエルを敵の手から救いました。そして、このダビデに、彼の世継ぎの子から、神の国を治める者が出てくるという、メシアの約束が与えられたのです。

そのダビデの家から、新芽が生えて、根から若枝が出てくるというのは、まさに、ダビデの末裔のヨセフ家を預言しています。ユダの国は、エホヤキンを最後として主は彼から王を出すことはさせないとエレミヤを通して宣言されました。バビロンに捕え移され、その後でゼルバベルなど総督で、ダビデ家出身という者はいました。けれども、ダビデの家系は次第に削り取られていきます。紀元前から紀元後に移行する時には、ダビデ家はマタイ 1 章のバビロン捕囚以後の系図にあるように、細々となんとか保っていた、というところだったのです。しかし、そのような何にもない、貧しい家庭の中に主がお生まれになりました。そして、この方がすくすくと育って、それで若枝となり実を結ばせるようになるのです。ダビデの子イエスです。

<sup>2</sup> その上に主の霊がとどまる。それは知恵と悟りの霊、思慮と力の霊、主を恐れる、知識の霊である。

主が実を結ばせていかれるのは、御霊が彼の上に留まっているからです。福音書には、主が水のバプテスマを受けられる時に、鳩のような形をして聖霊が下られ、それから御霊によって荒野に入り、そして御霊の力を帯びて福音宣教活動を行われました。そして十字架への道も、ご自分の命を永遠の御霊によってお献げになり、聖霊によって、神が死者の中からの復活により、この方が確か神の御子であることが公に示されたのです。

そして、主の御霊の特徴が書かれています。この方は「知恵」の御霊でありました。福音書にある、主のことばには、知恵に満ちているということに最近、気づいています。当時の律法学者が反論することのできない言葉を語られています。そして、知恵には人々の納得があり、落ち着きがあり、一致がありました。

そして、「悟り」の霊であります。主は、すべてのことを知っておられました。一つの状況を知って

おられたので、人に教えてもらう必要がなかったのです。そのことによって隠し立てするのではなく、すべての事を主の前で心を注いで知っていただくということが大事ですね。

それから、「思慮の霊」であります。主が何かをご計画され、それに基づいて実行される時に、主の御霊によってその計画を立てられました。そこには主の知恵と思慮深さがあります。さらに、「力の霊」が主にありました。それは力を示す働きに必要なことです。信仰によって、誰か足のなえた人を立たせることや、病を癒すことなど、力のともなう御霊の働きがあります。

そして大事なものは、最後です。「主を恐れる」霊、そして「知識の霊」です。主の知識とは、主を人格的に知ることです。主ご自身を私たちが親密に個人的に知るには、私たち自身が神に親しく交わりたいと願う思いがなければできません。それから主を恐れることですが、悪から離れます。また、主を恐れることによって、人を恐れないこと。自分の判断ではなく、主の判断を仰ぐこと。イエス様はこの御霊に満たされていたので、次のように治めることができるのです。

<sup>3</sup> この方は主を恐れることを喜びとし、その目の見るところによってさばかず、その耳の聞くところによって判決を下さず、<sup>4</sup> 正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す。口のむちで地を打ち、唇の息で悪しき者を殺す。<sup>5</sup> 正義がその腰の帯となり、真実がその胴の帯となる。

イスラエルの国において、不正がはびこっていた時に、彼らは自分の勝手な判断で、裁判において判決を下していたという内容が 10 章 1-4 節にありました。しかし、ここで預言されている主の裁きは真逆です。「主を恐れることを喜び」とあります。イエス様はこのことを思っか、次のように発言されています。「ヨハネ 5:30 わたしは、自分からは何も行うことができません。ただ聞いたとおりにさばきます。そして、わたしのさばきは正しいのです。わたしは自分の意志ではなく、わたしを遣わされた方のみこころを求めるからです。」

そして、主は、「正義をもって弱い者をさばき、公正をもって地の貧しい者のために判決を下す」とのことですが、山上の説教が、まさにこれでしょう。心の貧しい者は幸いであると言われました。そして、足なえの人を立たせました。らい病にかかっている人を清められました。悪霊を追い出されました。弱い者たちに寄り添い、解放してくださいました。

そして、4 節に後半から、預言は一気に、主の再臨の中身に入っています。ここはまさに、黙示録 19 章に出てくる、白い馬に乗って戻ってこられる主のお姿です。

11 また私は、天が開かれているのを見た。すると見よ、白い馬がいた。それに乗っている方は「確かで真実な方」と呼ばれ、義をもってさばき、戦いをされる。12 その目は燃える炎のよ

うであり、その頭には多くの王冠があり、ご自分のほかはだれも知らない名が記されていた。13 その方は血に染まった衣をまとい、その名は「神のことば」と呼ばれていた。14 天の軍勢は白くきよい亜麻布を着て、白い馬に乗って彼に従っていた。15 この方の口からは、諸国の民を打つために鋭い剣が出ていた。鉄の杖で彼らを牧するのは、この方である。また、全能者なる神の激しい憤りのぶどうの踏み場を踏まれるのは、この方である。16 その衣と、ものところには、「王の王、主の主」という名が記されていた。

主がこのように、悪しき者たちをことごとく滅ぼされるのは、心貧しき者たちのため、弱い者たちのゆえです。神を信じる信仰のゆえに苦しみ、殉教した人々のためです。そして、イスラエルの残りの民のためです。

## 2B 獣にも及ぶ平和 6-9

そして、主が地上に再臨されて、神の国を、義と公正をもって裁かれる中で、与えられた平和が、獣たちにまで及ぶ幻が、次にあります。

<sup>6</sup> 狼は子羊とともに宿り、豹は子やぎとともに伏し、子牛、若獅子、肥えた家畜がともにいて、小さな子どもがこれを追って行く。<sup>7</sup> 雌牛と熊は草をはみ、その子たちはともに伏し、獅子も牛のように藁を食う。<sup>8</sup> 乳飲み子はコブラの穴の上で戯れ、乳離れした子は、まむしの巢に手を伸ばす。

先に、主が支配されることによって、平和が広がる預言がありました。「9:7 その主権は増し加わり、その平和は限りなく、ダビデの王座に就いて、その王国を治め、さばきと正義によってこれを堅く立て、これを支える。」とありました。その平和が、被造物全体に広がります。

獣が他の肉を食べるという状況は、初めからあったのではないのです。アダムが罪を犯す前は、獣の中には肉食はなかったのです。「創 1:30 また、生きるいのちのある、地のすべての獣、空のすべての鳥、地の上を這うすべてのもののために、すべての緑の草を食物として与える。」すると、そのようになった。」したがって、主が罪を贖われ、被造物を回復される時は、草食動物だけになるのです。ですから、キリストが来られたことにより、人の罪が赦され、贖われます。それだけでなく、神が意図された世界に引き戻してくださいます。「ローマ 8:21 被造物自体も、滅びの束縛から解放され、神の子どもたちの栄光の自由にあずかります。」

<sup>9</sup> わたしの聖なる山のどこにおいても、これらは害を加えず、滅ぼさない。主を知ることが、海をおおう水のように地に満ちるからである。

エルサレムにおいて、獅子や豹、熊、そして蛇も、いっさい害を加えないと言っています。その理由が、主を知ることが全地に満ちるからだとあります。海をおおう水のように満ちるように、平和が

訪れます。これだけ、主を知るといことが、平和の実を結ばせるかしれません。私たちが、主を知って、平和の実を結ばせているでしょうか？

### 3B 残された民 10-16

そして次は、イスラエルの民にとっての救いが書かれています。それは、「彼らが、神の約束の地に戻って来る」という救いです。主は、イスラエルの民にカナンの地を所有することを約束されました。しかし、彼らが罪を犯し続ければ、そこから引き抜かれると警告されていました。はたして、彼らは罪を犯し続けて、それで捕え移されるのです。北イスラエルはアッシリアに、南ユダは、バビロンに捕え移されました。彼らは捕え移されてから七十年後に帰還しましたが、次の預言は、その規模をはるかに超えています。「その日」という言葉から始まります。主の定められた、究極の働き、すなわち終わりの日に行われることです。

### 1C 諸々の民の集結 10

<sup>10</sup> その日になると、エッサイの根はもろもろの民の旗として立ち、国々は彼を求め、彼のとどまるころは栄光に輝く。

主は、旧約の時代から、異邦人に対する救いの働きを明らかにしておられます。エッサイの根、すなわちキリストに、もろもろの民がこの方を旗印として集まり、国々がキリストを求めています。これは、イザヤ2章に出てきた、主の家の山、エルサレムのことです。そこに主イエスがおられて、そこから主の教えが出てきます。それで、すべての国々が流れてくる、という預言がありました。

この神のご計画が、今も進行しています。世界中に、ユダヤ人ではない人々の中に、イスラエルのメシアを信じ、求めている人々が起こされています。私たちが、まさにその者たちです。そして、現代、聖地旅行やイスラエルへの訪問が可能になった今、イスラエルに行けば、世界中のキリスト者が集まって、主を求めています。10月の初めには、「国々の行進」となづけられた、エルサレムでイスラエルを祝福する行進を、世界中から集まったクリスチャンたちが行います。<sup>1</sup>これを見ると、将来、主が戻ってこられた時の前兆を見ているような気がします。

### 2C 世界からの帰還 11-12

<sup>11</sup> その日、主は再び御手を伸ばし、ご自分の民の残りの者を買収される。彼らは、アッシリア、エジプト、パテロス、クシュ、エラム、シンアル、ハマテ、海の島々に残っている者たちである。<sup>12</sup> 主は国々のために旗を揚げ、イスラエルの散らされた者を取り集め、ユダの追い散らされた者を地の四隅から集められる。

主は、「再び御手を伸ばし」と言われています。これは、初めの買収りが、出エジプトであるこ

---

<sup>1</sup> <https://www.jpost.com/israel-news/article-761664>

とを示しています。エジプトの地で苦しみ、虐げられていた民を主が連れ出して、約束の地に導かれたように、再び御手を伸ばして、世界の四隅に散らされている人々を集められるということです。

ユダヤ人は、バビロンから帰還したことだけをここでは指しているのでしょうか？違いますね、バビロンの地以上の広範囲、いや、世界の四隅からの帰還です。そして、「その日」と宣言しています。これは、終わりの日に世界に散らされている人々を主が集めてくださるという約束です。「マタイ 24:31 人の子は大きなラッパの響きとともに御使いたちを遣わします。すると御使いたちは、天の果てから果てまで四方から、人の子が選んだ者たちを集めます。」イエス様が再び地上に来られる時に、天の果てから、残された民を集めます。

イザヤが預言をした時は、バビロン捕囚前です。捕囚後、七十年で帰還が許されたのですが、帰ったのはごく一部で、多くの人の生活が離散の地に定着していて、残っていました。そして、ローマの支配下、イスラエルの地にあったユダヤ人共同体は、紀元 70 年のローマ軍によるエルサレム破壊によって、奴隷にされたりして、ごくわずかを除いて、世界に散っていきました。

しかし、18 世紀の後半から、ロシアや東欧から、また西欧からユダヤ人が少しずつ帰還してきました。そして 1948 年、イスラエルが建国します。その日のうちに、周辺のアラブ諸国から一斉に攻撃を受けました。その時に、アラブ諸国にいた、先ほど言及したバビロン捕囚後も留まり続けていた、つまり二千五百年ぐらいの離散の歴史をもったユダヤ人たちが、追放されていったのです。それで、建国後にも帰還民がどっと押し寄せます。そして今も世界中から戻ってきているのです。自分たちの住んでいるところが政情不安のために、戻ってきている場合が多いです。

その姿を預言する人がいました。エゼキエルです。「20:34 わたしは、力強い手と伸ばした腕、ほとばしる憤りをもって、あなたがたを諸国の民の中から導き出し、その散らされている国々からあなたがたを集める。」彼らが、悔い改めて主に立ち返ったから帰還しているのではなく、ほとばしる憤りをもって、と言われます。つまり、苛烈な環境の中から連れ出して、集めると言われています。それが、まだ主に立ち返らないまま帰還して、そこで大きな患難を受けて、そこで残された者たちが神により頼むということになるのです。

ここでの預言は、まず、「アッシリア、エジプト」とあります。この二国は、イスラエルの民を支配していた、代表的な国です。南がエジプトです。イスラエルの民はそこから出てきたのですが、後の歴史で、イスラエルの領域に大きな影響力を残し続けました。そして、北はアッシリアです。今のイラク北部で、モスルという町がありますが、その郊外に首都ニネベがありました。イザヤの時代は、アッシリアが脅威でした。エジプト文明と、アッシリアやバビロン、ペルシアなどの帝国を出してきたメソポタミア文明に挟まれているのが、イスラエルです。そこからの帰還は、すなわちその全域が、主のために解放されたという、強い意味合いがあります。

そして、「パテロス、クシュ」とあります。パテロスは今の上エジプトを指します。エジプトの南部です。そしてクシュは、今のスーダンやエチオピアのことです。パテロスの南にあります。そして、「エラム、シンアル」とあります。エラムは、ペルシアの前の古代の国です。イランにあります。そして、シンアルは、シュメールのことで、バビロンがそこから出てきます。イラクの南部にあります。それから、「ハマテ」とは、シリア中部にあります。約束の地の境の町として登場します(民数 34:8)。そして、「海の島々」とありますが、これは狭い意味では地中海に浮かぶ島々のことです。けれども、イザヤ書では、「はるか遠くの島々」ということで、使徒の働き 1 章 8 節に出てくる、「地の果て」と似たような意味になっています。つまり、天の四方から民を連れ戻すということなのです。

### 3C 一致による力 13-14

<sup>13</sup> エフライムのねたみは去り、ユダに敵する者は断ち切られる。エフライムはユダをねたまず、ユダもエフライムを敵としない。

イスラエルの回復は、ソロモンの死後分裂したその傷の癒しも含まれます。エフライムとユダはずっと、妬みの中でありました。仲間でありながら競争していました。イザヤが預言した時、アハズ王は北イスラエルのペカから攻められていました。しかし、主がその間に仲直り、和解を与えてくださっています。

<sup>14</sup> 彼らは西の方、ペリシテ人の肩に飛びかかり、ともに東の子らからかすめ奪う。彼らはエドムとモアブにも手を伸ばし、アンモン人も彼らに従う。

一つにされたイスラエルは強いのです。西では、ペリシテ人が齒向かうことができなくなります。今のガザ地区です。そして、東は、今のヨルダンですね。エドムは死海の南から紅海のアカバ湾にかけて。モアブは、死海の東、アンモンは死海の北、今のヨルダンの首都アンマンのところですよ。このようにして、周囲の敵から攻撃されることもなく、しっかりと制することができます。

このように、国の分裂が修復し、一つにされることも、救いの一環です。周囲の敵から守られることも救いです。私たちも霊的に内から外から葛藤がありますが、キリストにあって一つになって戦う時に、キリストの平和が満ちます。

### 4C 全域の平和 15-16

<sup>15</sup> 主はエジプトの海の入江を干上がらせ、また、その焼けつく風の中で御手をその川に向かって振り動かし、それを打って七つの水無し川とし、履き物のままで歩けるようにする。<sup>16</sup> 残されている御民の残りの者のためにアッシリアから大路が備えられる。イスラエルがエジプトの地から上って来た日に、イスラエルのために備えられたように。

エッセイの根によって、神の国がこのように広がります。残された民が帰還することのできる大路を神が備えてくださる、というものです。イスラエルは、先ほど話しましたように、南はエジプト、北はメソポタミアの文明に挟まれており、国際的な通商路が走っていました。新約時代には、ラテン語で、ウィア・マリス、イザヤ書 9 章には「海沿いの道」と訳されている幹線道路が走っていました。しかし、同時にこの大路は、二つの大国のせめぎあいの場と化します。その中で、イスラエルはずっと翻弄されていました。しかし今、主がその全域を制してくださるということです。イザヤ 19 章に、エジプトに対する預言の中に、このすばらしい大路の姿が鮮やかに啓示されています。イスラエルが第三の国として、その真ん中で主をあがめるところとなり、アッシリアからも、エジプトからも主をあがめに、人々がやってきます。

## 2A 救いの喜び 12

このようにして、イザヤに主が、すばらしい救いのみわざを、残りの民に備えておられることが示されました。それでイザヤが、主をほめたたえます。主が救いの神であることをほめたたえます。

### 1B 主にある泉 1-3

<sup>1</sup> その日、あなたは言う。「主よ、感謝します。あなたは私に怒られたのに、あなたの怒りは去り、私を慰めてくださったからです。」

主の与える救いは、神の怒りからの救いです。イザヤが今、イスラエルに対して神が怒りを示されましたが、それは一時的であり、過ぎ去ったと言っています。イスラエルの民は、終わりの日に、患難を経ます。そして、残りの民が神により頼みます。そこで主が戻ってこられて、救ってくださるのです。その御怒りが過ぎ去ったとして、主に感謝しているのです。

私たちは、キリストにあつて霊的な救いにあずかっています。神の御怒りから救われるように定められています。「ロマ 5:9-10 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。敵であった私たちが、御子の死によって神と和解させていただいたのなら、和解させていただいた私たちが、御子のいのちによって救われるのは、なおいっそう確かなことです。」そして、「I テサ 5:9 神は、私たちが御怒りを受けるようにではなく、主イエス・キリストによる救いを得るように定めてくださったからです。」

<sup>2</sup> 見よ、神は私の救い。私は信頼して恐れない。ヤハ、主は私の力、私のほめ歌。私のために救いとなられた。<sup>3</sup> あなたがたは喜びながら水を汲む。救いの泉から。

救いが神からのものだ、ということです。これこそが、イザヤがこの預言の中で中心にしていることです。救いは、西からでも東からでもなく、主ご自身から来ます。残りの民は、自分たちを救うことのできるものが、他に何もないとどこまで、追い詰められます。そこで、自分たちを救うのは神

しかないとして、その御名を呼び求めるのです。そして主イエスが来てくださり、彼らを救ってくださるのです。敵どもを滅ぼしてくださいませ。

そして、この方が自分の力であると、ほめたたえています。そして、ほめ歌であると言っています。つまり、他の誰も称賛を受けない、主のみが救ってくださったのだから、この方をほめ歌う、ということなのです。パウロも、個人の宣教生活で、自分自身に頼ることができなくなったことがあります。それで、こう言っています。アジアで騒動が起こり、死にかけたのです。「Ⅱコリ 1:9-10 実際、私たちは死刑の宣告を受けた思いでした。それは、私たちが自分自身に頼らず、死者をよみがえらせてくださる神に頼る者となるためだったのです。神は、それほど大きな死の危険から私たちを救い出してくださいました。これからも救い出してくださいませ。私たちはこの神に希望を置いています。」

それから、「救いの泉」と言っています。救いを泉として喩えています。イエス様が、サマリアの女のところに行かれたのを思い出してください。井戸から水を汲みに来た女に対して、イエス様は、「この水を飲む者はみな、また渴きます。」と言われました。そして、「しかし、わたしが与える水を飲む人は、いつまでも決して渴くことはありません。わたしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠のいのちへの水が湧き出ます。(ヨハネ 4:14)」なぜ渴くことがないのかと言いますと、泉だからです。イスラエルには、遺跡に数多くの貯水槽の遺跡があります。とても乾燥しているので、雨が降った時に水を溜めるのです。けれども、その水はいつか枯渇します。けれども、イスラエルには各地に泉があります。そこに行けば、たまっていません。澱んでいません。動いているのです。そして尽きることがありません。だから、主の霊的ないのちを表しているのです。このいのちによって、私たちは救われました。そして、この救いは、キリストご自身にあります。

## 2B 良き知らせ 4-6

<sup>4</sup> その日、あなたがたは言う。「主に感謝せよ。その御名を呼び求めよ。そのみわざを、もろもろの民の中に知らせよ。御名があがめられていることを語り告げよ。<sup>5</sup> 主をほめ歌え。主はすばらしいことをされた。これを全地に知らせよ。

泉からの水は、湧き出て、人々に広がってきます。私たちに与えられた救いの喜びは、自分のうちに留めておくことばできず、人々にそれを伝えていきます。救いの喜びが、人々に良き知らせを伝える原動力です。「もろもろの民の中に知らせよ」と呼びかけていますが、これこそが、イエス様が弟子たちに命じられたことです。すべての国民をご自身の弟子としなさいと命じられました。主は、すばらしいことをされて、それをほめ歌えと命じています。

<sup>6</sup> シオンに住む者よ。大声をあげて喜び歌え。イスラエルの聖なる方は、あなたの中におられる大いなる方。」

最後は、すべての国民ではなく、自分たちの足元、シオンです。シオンに住み人々が、大声をあげて喜び歌えと、呼びかけられています。聖なる方が、只中に住んでおられるからです。私たちの救いの喜びも、いつもこうなるのではないのでしょうか？ 主の救いの喜びが、周りに溢れます。人々に、良き知らせを伝えます。そして、改めて、自分たちの間におられるキリストあがめ、この方の恵みに浴するのです。この方と共に住むことが、神の救いの究極の目的です。終わりの日、新しいエルサレムが天から降りてきます。そして、神が私たちと共に住み、そして救いが完成するのです。